



た ま ふ く

法人だより



きもちつながる、想ひひろげる。

保健からみえる保育園

〜コロナ禍の中で〜

砧保育園看護師

砧保育園は世田谷区の祖師ヶ谷大蔵にある、在籍園児数 81 名の、のんびりとした雰囲気のある園です。

新型コロナウイルス感染症によって様々な制約が長期間生じ、社会が混乱・変化している中で、子どもたちにも様々な影響が及ぼされているのではないかと危惧しています。特に昨年は1ヵ月以上の自粛生活やプール活動の中止によって運動不足となり、体力の低下・筋力や骨の衰え・体幹の発達への影響などが指摘され、園でも転倒時に咄嗟に手を出すことが出来ない姿やこれまででは起こらなかったちよつとした場面での怪我が多く見られました。今年は昨年ほど多くの怪我がみ

られていないことを考えると、日常生活がいかに成長や発達と密接に関係しているかを再認識させられました。

どのような状況の中にあっても子どもには現状に適応していく逞しさと柔軟性があることを実感し、だからこそ子どもたちの生活を守るだけではなく、創造していく大切さが保育園にはあるのだと知りました。今後の見通しも見えずまだまだ厳しい状況ではありますが、今出来ることを一つ一つ積み重ねていくことで、子どもたちの生活と健康をこれからも支えていきたいと思えます。



連絡先

〒155-0031
東京都世田谷区北沢
2-36-9-4F
社会福祉法人多摩福祉会
法人事務局
◆Tel. 03-6804-8345
◆Fax. 03-6804-8347
◆Mail:
tamafukushikai@gmail.com

保育園ナースのつぶやき

向山保育園看護師

看護師免許証を取得して三十五年。「看護師・看護士」から「看護士」となりました。現在も栄養士、保育士には「士」が使われ、なぜ看護師は「師」なのでしょう。栄養士、保育士、看護師は、それぞれ専門職です。看護師は、それぞれ専門職です。看護師は、それぞれ専門職です。看護師は、それぞれ専門職です。看護師は、それぞれ専門職です。

二十歳、学校で習った離乳食は水で薄めたみかん汁から与える。お粥も五分粥、全粥。今ではみかん汁から離乳食を与えることはなく、お粥は五倍粥、十倍粥と言う。時代とともに医療も保育も変化し、保育園の看護職として学ぶことは多々あります。

今号の目次

- 1 P 砧保育園・向山保育園
「保健から見た保育園」
- 2～3 P
新入職員紹介
- 4 P ごくま保育園
「夏の再現あそび」
- 5 P 上北沢ごくま保育園
「『できること』を考えて過ごした夏」
- 6 P 永山小学童クラブ
「夏の工作」
- 7 P 砧保育園
「夏の保育」
- 8 P 向山保育園
「かぶとむしの飼育と名前」



最近のことでは「新型コロナウイルス感染症」です。誰も予想していなかった感染症の発現で生活すべてが一変しました。情報リテラシーを踏まえて職員へ情報提供、ありとあらゆる感染症対策。

想定外だったのは、子どもの視力、虫歯保有率の悪化。緊急事態宣言中の生活は、大人も体調管理が難しい中、子どもの体や心は、わからないうちに影響を受けていたのです。そしてこれからも子どもたちの生活環境は変化していきま

上北沢こぐま保育園保育士

(新卒採用) 明星大学卒

私は、ももの木のおうち(0歳児クラス)の担任をしています。入職して半年以上経ちますが、毎日が学びの連続であったという間の7か月間でした。実際に保育者として働き始めると、自分が想像していた以上に大変で難しい、というのが正直な感想です。特に初めは、睡眠・食事・遊び等の生活リズムの作り方、離乳食の進め方など、一人ひとりの月齢や特性に合わせて、家庭との連携を図りながら考えていくことが難しく感じていました。しかし、その時に様々な先生方からアドバイスを頂く中で、色々な方法・やり方があるけれど、“子どもにとっていいこと”を軸に考えていくことが大切なのだと思えました。子どもを第一に考える視点を大切にしながら、これからも日々の保育から多くを吸収し、目標とする姿に一步一步近づいていきたいと思います。



子どもたちの気持ちにいつもやさしく寄り添っています

コロナ禍での採用活動は、オンラインでの説明会や採用試験を導入しながら手探りで進んだ変革の年でした。

4月の入職以来、(ほぼ)常に緊急事態宣言が出ていた7か月を新たな職場で過ごした新入職員たち。今の気持ちを聞いてみました。

写真に添えられたコメントは各施設の先輩からのものです。

新入職員 に 聞きました

幼稚園で長く働いた後、この4月にこの法人に入職しました。今までとは違う保育の流れに戸惑うことが多かったというのが率直な気持ちです。とにかく周りの先生方の動きを見ながらついていくのが精一杯でした。考え込んでしまうことも多かったのですが、子どもの笑顔に支えられてきました。また、5歳児のお泊りに参加させてもらえたことで、子どもはもちろん大人同士も一つのことに向かって力を合わせていく中での達成感や子どもの成長を共有できたことが嬉しかったです。本園の掲げる理念を理解し、それを具体化する保育をどのように進めればいいのか、自分らしい保育ができるようにするにはどうすればいいのかを考えています。もっと周りの先生方や保護者とも積極的に関わりたいながら、子ども達の成長をサポートできるようにしたいと思います。



子どもを引き付けるプロフェッショナル☆

上北沢こぐま保育園保育士

(キャリア採用) 保育士歴 11年

こぐま保育園保育士

(新卒採用) 聖セシリア短期大学卒

元気いっぱい!
笑顔のおすそわけ



こぐま保育園で働き始めて半年がたちます。この半年、時間が早いような遅いようなと感覚がわからなくなりつつ、働いてみて感じたことや自分の思いなどを書こうと思います。

私がこぐま保育園で働いていて一番に感じるのには、「楽しい」ということです。今は0歳児クラスに所属していますが、最初は「楽しい」という感情ではなく「不安」の方が大きかったです。初めての保育でしかも0歳児と聞いてとても驚いたのと同時に、言葉がまだ話せない子どもたちとどのように関わりたいかを考える。しかし、そのような不安から楽しいに変わった瞬間がありました。こぐまは担当制の保育なのですが、担当の子がオムツ替えのときに私が歌ったわらわらに合せて笑って一緒にやってくれたことを今でも覚えています。毎日楽しい事だけではありませんが、その「笑顔」の小さな出来事に私はとても癒され、まさに「楽しい」に変わった瞬間でした。

体調崩さず、いつも元気いっぱい!!



4月から上北沢こぐま保育園に入職し、栄養士をしています。最初の頃は、業務内容や子どもとの関わり方など分からないことも多く不安や戸惑う事ばかりでした。しかし、困った時には先輩方が丁寧に教えてくださり助けてくださるのでとてもありがたいです。また、子ども達が「今日の給食おいしかったよ!」「今日この野菜食べられたよ!」と声を掛けてくれることがとても嬉しく、やりがいになっています。入職して半年が経ちましたが、まだまだ知識を増やさなければいけないことも多く、効率よく業務を行えるようになることが今の目標です。今後も、食を通して子どもたちの成長をサポートし、日々の業務から多くの事を吸収していきたいと思っています。

上北沢こぐま保育園栄養士

(新卒採用)香蘭女子短期大学卒

上北沢こぐま保育園保育士

(キャリア採用)他の社福から転職

4月から、上北沢こぐま保育園の異年齢クラスで担任をしています。1歳から5歳が一緒に暮らすってどういうことだろう、どのようなねらいをもって保育をしているのかと日々悩み、考え、そして子どもたちに教わりながら保育をしている毎日です。多摩福祉会は、地域のニーズを丁寧に汲み取り、求められるかたちに添えるよう、柔軟にサービスのありかたを変化させてきた法人だと思っています。わたし自身も、地域の家庭に目を向け、ニーズに寄り添う保育を実現できる保育者に育っていきたいです。



絵本をリズムにのせて読むのが上手!

初めて子どもたちに会った日はとても緊張しましたが、こぐま保育園に来て半年くらい経ち、子どもたちとの関係もだんだんとつくられてきて、変化を実感できることがとても嬉しいです。初めは、お互いに相手のことを何も知らないし、仕事内容も含めて覚えることが多く大変でした。子ども



子どもに寄り添う
あたたかい瞳

のかかわりで悩むことも多く、試行錯誤の日々なので、ずっと大変さは感じていますが、子どもたちと共に過ごす時間が楽しいです。また、1歳児から5歳児までの異年齢保育なので、異年齢ならではの子どもたちの姿を見ていると、異年齢保育という環境の良さを感じられます。また、1クラスの子ども数の数も多い分、保育士の人数も多いため、先輩たちの保育を見て学んだり、困った時に助けてもらえたりするので安心感があります。

こぐま保育園保育士

(新卒採用)名寄市立大学卒



「夏の再現遊び」

こぐま保育園 かぜのおうち

毎年、異年齢2クラスのどんどんさん（5歳児）が共同開催する夏のお祭りごっこ、通称『庭フェス』。例年どんなお店屋さんを出したいかを子ども同士で話し合い、子どもたち中心に準備を進めていく手作りのお祭りです。

今年も夏が近づき、子どもたちと話し合いを行いました。まず初めて出てくるのは、昨年度のどんどんさんの姿。「Aはさかなつりやさんだったよね。」「ヨーヨーやさんはBがやってた！」など、憶れていたどんどんさんの姿を思い出しつつ、自分がやりたいお店のイメージを広げていきました。そしてアイス屋さん、クレープ屋さん、釣り屋さん、ヨーヨー屋さんの4つのお店が候補に上がりました。品物の作り方がまだ具体的なイメージが出来上がっていないだったので、その日は一度話し合いを終わりにし、また後日相談しようと約束をしました。そして2回目の話し合いの日、まず子どもたちからの一言が「せんせー、ア

イスやさんとヨーヨーやさんにしたよ」でした。これには大人もびっくり！一体いつ話していたの?!となるほどでしたが、子どもたちの中で自然とこの2つのお店屋さんに決まったようでした。お店が決まれば、次は品物作りに取り掛かります。

アイスにはティッシュを花紙で包みました。コーンは画用紙に模様を描きくるくると円錐状に巻きました。ヨーヨー屋さんは「ヨーヨーを釣れなくても1つはあげるようにする。」というルールを子どもたちが決めました。理由を聞くと「だって小さいこができないかも（釣れないかも）しれないからさあ〜」と当日お客さんとなる小さい子のことも考えてくれる姿はまさにどんどんさん！自分たちが楽しいだけでなく、小さい子を楽しませてあげたいという思いが伝わってきました。

迎えた庭フェス当日、お天気はあいにくの雨となり「庭フェス」ならぬ「食堂フェス」となりましたが、どんどんさんは法被を着て気分十分！アイス屋さんは本物のようないすスプーンを使いながら、「何味がいいですか?」「コーンとカツ

ブどつちがいいですか?」と本格的なやり取りをしていました。小さい子には実物を見せて「どつちにする?」と優しく選べるように声をかけてくれていました。もちろんヨーヨー屋さんも小さい子がくると、「てでとつてもいいよ!」と声をかけたり、「このいろがいい?こつちにする?」など、これまた優しく対応してくれていました。そんなどんどんさんの活躍もあり、「庭フェス」ならぬ「食堂フェス」は大賑わいで終えることができました。

後日、アイス屋さんの再現遊びができるといいなと思った職員が、アイススプーンに丁度おさまるサイズのお手玉を5色作り、スプーンと共にそっと台所コーナーに置いておきました。するとそれに気づいた子がお手玉をスプーンですくい、透明カップに入れ「アイスどうぞ〜」とアイス屋さんごっこが始まりました。それを見た小さい子もスプーンでお手玉をすくってお皿にたくさん並べ大人のもとへ。小さいアイス屋さんの誕生です。同じ色だけ集める子、カラフルにアイスを盛り付ける子、チェーンなどと組み合わせ

パフェのように飾り付ける子とそれぞれアイス屋さんのイメージを広げ楽しむ姿が多くみられました。ちょこちょこさん（1歳児）も大きい子のマネをし、スプーンですくい、カップへぽとん、ぽとんと何度もお皿へ移し替えを行う姿もありました。お手玉の程よい重さがあったことがちょうどよかったのかなど感じました。また、お手玉を作った職員も「作ってよかったな〜」とほっこり。

今年の夏はコロナの感染者も多く、家族でのお出かけの経験が少なかったのか、例年みられるBBOごっこなど夏らしい再現遊びがあまり見られませんでした。この「庭フェス」の遊びをきっかけに夏らしいごっこ遊びが展開することができてよかったです。





「できること」を考えて

過ごした夏

上北沢こぐま保育園 副園長

水を使った活動は、夏の保育の大きな柱になります。水中で心身ともに自身を解放できるプールでの活動ができなくなってしまう昨年度は、その代わりに何ができるのかを考え、五感を刺激できる活動をより多く取り入れました。そんな昨年度を越えて、今年度プールの実施は、感染対策を行いながら各園の判断に任せられることになりました。昨年度出来なかったプールの活動を子どもたちに体験させてあげられることを、うれしく感じると同時に、

昨年度未実施だったため初めにプールの指導をする職員も多く、職員自身



に不安もありました。少しでも自信をもって子どもたちの前に出られるように、ドル平泳法の講師の先生に来ていただき、職員への指導もしていたできました。

プールは週1回、おうちごとに入りました。子どもたちは、「明日プール?」「何曜日がプール?」「水着持ってきたよ」とプールを楽しみに、見通しを持ち過ごしていました。2歳児のすくすくさんにも、初めてのプールという家庭があり、驚くとともに、コロナが奪っていったもの大きさも痛感しました。実際の活動では、「顔を付けられるようになった」「体を浮かせられるようになった」とそれぞれが一步踏み出せた瞬間を見ることができました。「苦手だけど、あの子がやっているからやってみようかな」と顔付けに挑戦する子もいました。個人で入る全身浴ではなく、一緒に入れるプールならではの姿でした。言葉にはならないけれど、不安そうな子に対して「こうだよ」と身振り手振りで教えてあげて、その子が出来たときに、教えてあげた側の子が「一緒にできてうれしい」という満面の笑みを見せて

くれた乳児の姿も印象的でした。5歳児だけのどんどんプールも行いました。特別な時間と感じられつつも、違うおうちの先生と入るどんどんプールに、緊張感からいつもと違う姿を見せる子もいました。週1回のプールでは、『鍛錬』という部分では課題も感じました。

プール以外の日は、昨年行った五感を使う活動も引き続き行いました。具体的には泥んこ遊び、水遊び、絵の具や、氷、食紅、米粉ねんどを使った活動などです。昨年度の経験を基に、今年の子どもの姿に合わせて、よかった部分はそのままに、改善の必要な部分は改善も行いました。どの活動も普段の生活の中ではなかなか体験しない感触なので、抵抗感を示す子もいました。でも、大人が本気で遊ぶことで「なにやってるの?」「手伝おうか?」と、子どもたちの気持ちも動いたり、興味が増したりもしました。新しい刺激によって、興味関心が広がったうれしいなと思いつながら計画していきましょう。異年齢の3つのおうちそれぞれでは、自分たちが作ったロボットのカミーからお手紙が届いたり、子

どもたちの発案で園庭に水路を作ってみたり、絵本から忍者になり



きってみたりと、それぞれの興味が形になった夏でもありました。

夏前から、子どもたちの食事に対する意欲、喫食量の少なさが職員間で話題に上がり始めました。夏本番、プールの時期に喫食量が増えるかと思いきやそうではありませんでした。現在も引き続きいろんな面から子どもたちの興味関心を引き出し、大人の意識を変えていつている最中です。また、これからは戸外活動が気持ちのいい季節になります。夏の保育で子どもたちと一緒にたくさんの体験をした私たち職員も、これからの秋の活動を子どもたちと共に考えながら充実した活動を実現させていきたいと思っています。



永山小学童クラブの夏休み工作



手作りメモ帳

嘉藤 るみ



永山小学校からたくさんいただいた罫線用紙を自分好みの大きさに切って、手作りのメモ帳を作りました！とじ穴には針金を使って器用にリボンを通し、表紙には絵を描いたり型紙を使って可愛くアレンジをしていました！1つ完成すると「別の大きさのメモ帳をもっと作りたい！」と紙の大きさとリボンの色を変えていくつか作っている子もいました。「このメモ帳はお家で使って、こっちのメモ帳は学童で絵を描くのを使うの」と嬉しそうに話していました。

アイロンビーズ

渡邊 愛

夏休みの2日間アイロンビーズをしました。アイロンビーズができるようになった子どもたちは、準備をしている職員の所に来て、「ねえ まだ？」と楽しみに待っていました。
 人気のある型は、子どもたちで順番を決めて製作をしていました。友達同士で協力し合いながら必要なビーズを見つけて、作っている子もいました。
 完成した自分のアイロンビーズを見て、とっても嬉しそうなお子どもたち！カブトムシ型のアイロンビーズを作った男の子3人は、作ったカブトムシでトントン相撲をして遊んでいました。
 1年生の女の子はアイロンビーズの猫たちのドールハウスを何日もかけて作っていました。出来上がったアイロンビーズを使っていろいろな遊びが展開されていたのを見て、子どもたちの想像力は素晴らしいなと思いました。



うちわ作り

石川 悠



暑くて長い夏を涼しく、楽しく過ごそうと、夏休みにうちわ作りの工作を企画しました。子どもたちがどんなうちわを作ろうかなあと考える時間、友達とわいわい製作する時間、うちわを使って涼をとる時間、持ち帰って家庭でお話する時間、少しでも夏らしさを感じられたらと企画しました。カラーセロハンやキラキラテープなどキラキラ系の材料や、マスキングテープなどクラフト系の材料を使って、それぞれ夏をイメージしたうちわを作ったり、好きなものを詰め込んだうちわを作ったりしました。
 はじめは特にお手本もなく、「自由に作っていいよ」と言っていたのですが、上級生が大きく漢字で「夏」と書いたデザインを気に入った子が何人かいました。大好きなカブトムシやクワガタの絵を書いたり、猫の顔を大きく描いて耳を付いたり、キラキラモールでまわりを縁取って、応援うちわを作っている子もいたり、うちわで好きなものを主張している子も多かったです。
 作り終わってからは、完成して満足したのか「これ絶対持って帰りたい！」と言っすぐリュックにしまっていました。帰っておうちの方へのお土産話になったでしょうか。それぞれのこだわりを聞くのがおもしろかったです。なかにはうちわを持って踊り狂う子がいたり、うちわで涼んでいる子はあまり見かけませんでした。うちわを通じてみんなの心の中を少し、覗けたような気がしました。

砧保育園 夏の保育

「今日うんちでたよ!」

昨年度は世田谷区の方針で中止となっていたプールでしたが、今年度は各施設毎の判断でいいということとなり、砧保育園は例年通り入ることになりました。昨年度入れなかったことで、子どもたちの姿の違いから見えてきたプール活動の意義について確かめ合った貴重な機会となりました。

プール開きをするにあたり、毎年子どもたちに生活習慣について大切にしてほしいことを伝えていきます。具体的には早寝早起き、朝ご飯を食べる、朝うんちをしてくる(出なくてもトイレに座る)こと等です。その話をした後日、「今日うんちでたよ!」「昨日失敗しちゃった:寝るの遅くなった」「今日早起きできたんだよ!」等と話していたり、保護者からも「うんちしないとプール入れないから!」と言ってトイレでうんちをしていました」と連絡帳に記載があり、家庭の生活と保育園の生活が繋がっているな〜と感じられて嬉しい姿でした。また、「今日

プール何番目?」「何時に着替え始める?」「自分で水着着れるよ!」等、生活に見通しを持って意欲的に生活に向かう姿も沢山見られました。今年度新たに異年齢クラスに進級した3歳児も、プールをきっかけに多くの子がトイレで排便ができるようになり驚きました。

このような姿から、プールに入ることでの心地良さや自信をつけることはもちろん、「プールに入りた!」という意欲から生活行為・習慣等の様々な面で成長していくことを改めて実感し、確認できた夏となりました。プールに限らずですが、意欲が自然と湧き出てくる活動保障が本当に大切だと感じています。



「生命が繋ぐ友達や地域との関わり」
飼育が大大好きなきぬたっこ。とにかく夏は虫等を捕まえて楽しんでいきます。今年度はカブトムシ、クワガタ、バッタ、カマキリ、イモリ、ヤモリ、グッピー等を飼育していました。砧保育園には保育室前にウッドテラスがあるので、陽射しがあたたかい空間で毎日生命と触れ合い、癒されたり凶鑑を広げて研究したり(大人顔負けの知識!)、クラスを越えた友達関係を深める場にもなっており、貴重な空間となっています。

そんな中、園に隣接するおうちの方からメダカを提供していただけたというお話がありました。幼児クラスで相談し、可能なクラスで飼うことに。デリケートな魚なので、死んでしまうこともありましたが、子どもたちは興味津々で見ている。「なんかおおきくなったね!」「こちみてるよ!」と観察し、変化にもよく気付いていました。そのような時間が、今まであまり一緒に遊ぶことが少なかった子同士を繋げる機会ともなっています。

また、メダカを提供してくださっ



た方に子どもたちが手紙を書き、渡しにきました。その方は幼少期からの動植物との触れ合いが将来の環境問題への意識に繋がっていると考えているということで、「子どもたちの未来に投資できることがあればご協力させていただきます」と、園庭に植える樹木についてや、動物の飼育等のご提案をいただきました。地域の方との繋がりを活かしながら、子どもたちにとってより良い環境を模索していきたいと考えています。



かぶとむしの飼育と名前

向山保育園 保育士

転園してしまったUちゃんから頂いたかぶとむし4匹。メス1匹にオス3匹。かぶとむしがみつばち組(3歳児クラス)に来たことで、生き物を育てる楽しさを知り、虫が大好きな男の子たちは毎日のゼリーの餌やりを楽しみにしていました。『空のゼリーをごみ袋に捨てる係』、『ゼリーをあげる係』、と毎日やりたい子が集まり順番にやるのが楽しい様子でしたが。

8月下旬、メスがなんだか動かない…。朝その様子に気づいた子どもたちは「死んでるんじゃない?」「まだ眠いんだよ」と各々話していましたが、前日から全く動いていないことを知った子どもたちは死んでしまったということに気づきました。「死ぬ」ということをまだピンときていないからか、明るく笑いながら話すことが多かったのですが、一人が「お墓をつくってあげよう」と提案し、お墓を作ってあげることになりました。そして、ケースを観察していると、土の中に幼虫がいることに

気づきました。ハッ!とした顔をしてみんなで夢中に見ていると一緒にいたせみ組(4歳児)の子が「名前付けないの?せみさんはつけてるよ!」と言われました。みつばち組のみんなも「つけない!」とのことだったのでこの一連を『あつまり』をして話すことにしました。

あつまりでは一匹が死んでしまったこと、幼虫がいたことを話すると嬉しそうに考え出す子どもたち。考え抜いた末、決まった名前は、幼虫が「くねくね」。理由はくねくねしているから。かぶとむしは1



匹目が「ふーとー」。理由は笑っているように見えたから(なぜ笑)。2匹目が「だりー」。アニメか何かの名前なのか、マリー・ダリー・ウッドイーの中から選びたいとのことでした。3匹目が「かぶとむす」。「かぶとむし、じゃなくて、す、なの?」と聞くと念押しで「す!」と答えたのでこの名前になりました。

他にも案は沢山出ており、おしりが大きいから「ふじさん」。えさだから「エツサ」と、理由も名前もクスツと笑えたり、かぶとむしの様子をしっかりと見てるからこそその名前だというものだったりみんなで笑いながら話しました。

そして、その後は死んでしまったかぶとむしを表庭に埋めにいきました。「またみつばちさんに遊びに来てね」と、大人が手を合わせると子ども達も一緒に手を合わせてお祈り。そこで一人が「新しい幼虫が来たからだいじょうぶだよ!」と一言。大人が教えるわけではなく自分で生死というものを感じているのだなあと感じました。みんなで生き物を育てるという経験は初めてでしたが、もともと虫に興味がある

子はもちろん、あまり虫に積極的に触れてこなかった子も興味を示していました。図鑑だけでは感じる事の出来ないものを自分たちの目で見ている経験できることが、子どもたちの中でこれからの糧になっていけばいいと思います。



● 広報委員会 ●
中本 琢也
江藤 龍之介
岩崎 玲以
岡田 織

